

## 寿岳文章の和紙研究と寿岳文庫の資料について

杉原紙振興ボランティアの会代表 山仲 進

今日午前中に、向日市文化資料館で、向日庵和紙関連資料の展示とその説明をさせていただきました。その話をお聞きの方も沢山おられると思いますが、話としては重なる部分も多いかと思えます。

先ほども安平さんから紹介がありましたが、多可町の今の「道の駅」がある場所に、もとは杉原紙研究所がありました。その「道の駅」が出来ることになって、川向かいの狭いところに移転して、2、3年前からでしたか、道の駅を「杉原紙の里」と名前を変更して、杉原紙の研究所と紙の販売をする《でんでん》という施設と和紙博物館《寿岳文庫》とを一体化して杉原紙の里として観光的に売り出そうという取り組みがありました。

そういう表面的な動きと同時に、先ほどの安平さんのような地道な調査研究が続けられていました。この《寿岳文庫》と、和紙の展示直売をしている《でんでん》という施設は、杉原紙振興ボランティアという約20人のボランティア組織で管理運営されています。私は7、8年前くらいからお手伝いをさせてもらっています。月に5回くらい当番が回ってきますが、その時だけ見学者に説明したりして、その合間をみて、寿岳先生の資料を整理させていただいています。

寿岳文庫の資料の整理をどのように進めてきたかということについて、前々回、この法人・向日庵の前身の研究会の時に、兵庫県の民芸協会から『兵庫民芸』という会誌が紹介されていて、その中に「寿岳文章と和紙」という文章を浦部喜代子さんが書かれています。寿岳文庫の資料の整理は、浦部さんが研究所にいらしたときに一緒にやらせていただいたものです。今日は本当なら浦部さんに話していただく方が適切であったかも知れませんが、いまは美濃の方におられるので、私が代わりに話をします。『兵庫民芸』もぜひ一度ご覧下さい。

まとまった話にはなりません。寿岳先生の資料を整理する中で、とくに心を惹かれたいくつかの点についてお話しします。

### 『紙漉村旅日記』

まず、『紙漉村旅日記』の件ですが、寿岳先生は新村先生のお勧めもあって昭和12年～15年、37歳から40歳まで、全国をまわられたこととなります。「わが国に現存する手漉紙業の歴史地理的研究」というのが正式な研究の名称です。全国の東北から九州までの約100カ所の紙漉村を訪ねておられます。昭和12年から15年は日中戦争の真っ只中で、旅をすること自

体が困難であったのですが、写真を見ますとしづさんは下駄履きであったし、大変ご苦労されて旅をされたと思います。昭和16年からは太平洋戦争に入り、戦後には全国的に紙漉村は衰退、廃業される所がたいへん多かったことを考えると、そういう意味で、昭和15年というのはまだ昔からの紙漉場が余命を保っていた最後のチャンスだったのです。戦後になると見ることの出来なくなる紙漉きの風景とか、多くの種類の紙作りがたくさん残っていました。このような時代に全国を廻られた。そういうことを後から見れば、歴史的な変革直前の時代を見て記録され、しかも紙の収集をされた。これは巡り合わせであったかも知れませんが、歴史的に非常に大きなお仕事をされたことになると思います。

ここに持ってきた本が『紙漉村旅日記』向日庵本で、昭和18年京都向日庵で発行とあります。これは実は寿岳家から寄贈を受けた本ではありません。寿岳家からの寄贈本は寿岳文庫のケースに手書きの日記帳と一緒に展示してあります。この本は和田邦平さんという甲南大学で教授をされていた方からの寄贈本です。寿岳先生から和紙研究に関しては「私の跡継ぎだ」と言わしめたほど親しい方で、甲南大学を退官された後、兵庫県立博物館の館長も務めてられました。その和田先生の和紙関係資料も、寿岳文庫へ寄贈を受けていまして、本書はそうしたなかの一冊です。

この表紙をめくった最初のページに寿岳先生のサインがありまして、昭和46年に書かれたものですが、(【資料】を参照してください)

〈おもかげのせめてはこのこれのにきにかみすくわぎのあとたゆるとも〉

昭和辛亥一月 和田邦平学兄のたのみに答へて

壽岳文章 しづ

と連名があります。この本に対する先生のお気持ちがこの歌の中に込められています。この言葉はもう一つありまして、昭和22年に出た春秋社版『紙漉村旅日記』という和紙を使った小さい版で、その中に同じような歌が書かれています。それは「寿岳文庫」で編集した『寿岳文章が集めた和紙』という本の裏表紙にそのまま使わせていただいています。これには

〈おもひでのせめてはこのこれのふみにかみすくてわぎ けなはけぬとも〉

とあり、これは昭和39年ですからこちらの方が早いのですが、先生の紙漉きへの思いの込められた歌が書かれています。

先ほど安平さんから詳しくありましたが、寿岳先生が全国の紙漉村を旅された当時は、杉原谷では紙漉きが途絶えてしまっていて来られていないのですが、その直後、昭和15年8月2日、3日に新村出先生とお二人で杉原谷に来られました。これが、先生40歳の時ですが、その時の記録が『和紙研究』第7号にのせられた新村先生の「杉原紙源流考」と寿岳先生の「杉原谷紀行」ですが、この調査の時に案内をされた地元の小学校の先生であった郷土史家の

藤田貞夫さんという方が、後に昭和45年に『播磨の紙の歴史—杉原紙』という研究書を出されました。このことをきっかけに、大正末期、最後まで紙を漉いていた宇高弥之助さんという当時80歳くらいの方が、最初から最後までもう一度紙漉きを再現してみようということで復元された。そしてその当時の加美町の町長であった竹本修二という方が、非常に熱心に福井県や岐阜県や京都府の紙漉場を訪ねられて、町立の研究所をつくって再興しようと大変努力をされた。そして昭和47年、寿岳先生が72歳の時、杉原紙研究所ができました。4月18日に開所式があり、その時に寿岳先生もご出席になり、開所式の記念帳に、資料の文章ですが、第1ページ目に記帳していただいております（【資料】参照）。その前ページには、「杉原紙復興開所記念」という表題も先生の字で書かれています。その1ページ目に、

〈年たけてまた相見むと思ひきや いのちなりけり 播磨杉原〉

という歌を寄せられています。2、3日前にこの日の準備のために資料を見ておりましたら、寿岳先生のメモ書きで、この歌は西行法師の歌の本歌取であるとありました。

もう一つ紹介しますと、寿岳先生の書かれた『和紙落葉抄』（昭和51年）に、

〈喜寿の賀を 杉原に書くうれしさよ〉

という句がありまして、先生が杉原紙の復興に寄せていただいたお気持ちが心に染みます。こうしたことをここで紹介できるのも、私としては大変嬉しいことです。

話しの続きに、もう一つご紹介します。こちらは原稿用紙2枚半ほどに書かれた、平成3年（1991）に、当時加美町の『広報 加美』という広報誌に「杉原紙を永遠に守る」という特集が生まれ、その中に寿岳先生の文章が載ってまして、これが先生91歳の時で、亡くなられる前の、多分絶筆といえますか、ご自分はお目が悪くて書けないので、口述筆記（章子さんの代筆）されたものです。

私も年をとった。来年の3月に、それまで健康が許せば92歳になる。最近の私はともすれば、自らの歩んできた道を振り返りがちであるが、専攻の英文学とともに深く思いを致した紙漉きのことは、今もなおあれこれと思い出し、将来を考えることが多い。

とありまして、最後に、こうあります。

やっと訪れた平和が、手漉き滅亡の歯止めとなるかに見えたが、戦後史の展開は和紙生産に悲観的な運命を与えた。せつかくの平和であるのに、国家の経済政策は過疎を生み、地道な営々たる努力に生きる人を否定した。こうした風潮のなかで、かつての見事な杉原紙を蘇らせた杉原谷の人々の活躍はまことに感動的であり、日本の確かな希望なのである。

それにしても先生が和紙の復興を本当に願っておられたというお気持ちが溢れる文章だと思えます。

紙漉きという仕事は、大手の専業での紙漉きをしているところは別ですが、大部分の紙漉きは山間部の農家の副業で、農閑期の仕事としてやることであり、炭を焼くか、蚕を飼うか、紙を漉くかという風なことだったわけです。戦後になると新しい素材が生まれたり、太平洋戦争で働き手がどんどん失われていったということもあったわけですが、その直前の状況を記したこんな文章が『紙漉村旅日記』の中にあり、これを読むと感動します。福島県の山舟生村という箇所です。

…こんなに質朴で美しい村では、醜い紙の漉かれやうがない。[中略] 山舟生のやうな村では、悪い紙を漉かうと云ふ意識のないのは勿論だが、それかと言つて、良い紙を漉くことに専念してゐるのでもない。先祖代々伝えてきた技術を、忠実に守つてゐるだけである。

またもう一つ、新潟県の豊実村という箇所です。

・・・純粋な材料で、逞しい男手が心を籠めて漉き上げるのだから、この村の紙が世にも立派なことは言ふまでもない。それは今までに私たちの見てきた中で最も美しい紙の一つであった。

こういう風に現地を訪れることで、そこに暮す人々の村のたたずまいとか、生活に触れて、本質的に生活の中で用いられてこそ美しいということを実感されて来た。先生は紙というものが生活の中で實際いろんな形で用いられるということ、目で見ても確かめられる。このように紙漉村の旅というのは、多分これまでは誰もそういう経験をした方はおられないわけで、そのあとは寿岳先生のお仕事を受け継ぐようにして、何人もの方が、紙漉村を訪ねておられますが、その最初の第一歩をこの様にして踏み出されたわけです。

向日庵本には紙見本が 134 点、写真 199 枚が付いています。文章の方は講談社学芸文庫という文庫本でも出ていますが、この見本の紙は向日庵本でしか見ることはできません。それは大変惜しいと思ひまして、昨年 6 月に「手漉き和紙青年のつどい」という全国規模の大会で、150 人くらい杉原紙研究所に集まり、その大会のメイン行事として、寿岳先生が集められた和紙の展示を行いました。それに合わせて『寿岳文章の集めた和紙』という本を出しています。これは紙見本を写真に撮って、あとの写真版はそのまま、文章は旅日記から関係する部分を拾い出して使わせていただいています。それは先生のお仕事を紹介する上でなくてはならぬものと考えています。機会がありましたら是非ともご覧下さい。

もう一つ文章として紹介したいものがあります。昭和 53 年に、その前に京都高島屋でもありましたが、これは日本橋三越のもので、内容は同じもので、「伝統の手すき和紙十二匠展」のパンフレットです。デパートで催される巡回展でこう言うものを見る機会は、これからはほとんどないのではないかと思いますので是非見ていただきたいものです。下には芹沢銈介さんの「和紙賛歌」が載っています。【資料】

私たち夫婦が、日本全国の手漉紙業の現状を四年がかりで調べてまわったのは、太平洋戦争の前夜、日支事変はすでに始まり、国営バスも燃料をガソリンから木炭に切りかえるという非常事態の最中であつた。労働力も極度に不足していたが、それでも中部や東北の紙すきどころへ行けば、昔ながらの正直な手法で、見るからにほれぼれするような日用紙が、女手一つで漉き続けられているのに、私たちは感心した。特別な工人によって漉かれるのではなく、伝え通りに漉きあげさえすれば、誰が漉こうと、それが立派な紙になる和紙黄金時代の余映を、私たちはこの目で見届けたわけである。

(「伝統の手すき和紙十二匠展」)

この短い文章の中に寿岳先生の和紙研究のエッセンスが込められているのではないかと、そういう仕事を通して熟成されていく和紙文化研究の原点と言えらると思っています。私はほんとにこの言葉が気に入っています。こういう先生のお考えが熟成されていくのは、やはり柳宗悦とともに育て上げた民藝という考え方の一つの具体的なかたちで、紙漉きという仕事の中に見出される、そういう感動がこの言葉の中に伝わってくると思うのです。

ところで、最近出た岩波文庫の寿岳文章訳『ブレイク詩集』ですが、この本が 2013 年にどういういきさつで出たのか、私はわからないのですが、すばらしい出版であると思います。この中に次のように書かれています。

…こうして向日庵本『無染の歌』『無明の歌』は出来上がった。日本は険悪なみずからの歴史を形成しつつある頃であつたが、日本の一隅ではそういう邪悪なくらみの浄化作用のようにみごとな内容、みごとな形態の美しい本が出現しつつあつたのである。

柳宗悦は向日庵本の誕生を何よりも喜んだ。また、私の和紙への傾倒をこの上なくよしとした。和紙は民芸品の最たるものと言ってよいみごとな工芸品であることを十分に知っていた柳は、和紙が広範かつ深い研究の対象となることを予感し、かつその研究の切り口が民芸論そのものになることを悟っている、まことによき理解者であつた。・・・

1990 年 10 月 向日居にて

(「ウィリアム・ブレイクと柳宗悦の大いなる出会い―向日庵本の思い出をこめて―」、寿岳文章訳『ブレイク詩集』岩波文庫、2013 年)

これが、「1990年向日居にて」という、先生が90歳の時、もう多くの民芸のお仲間だった方々がお亡くなりになっていた時のものですが、和紙研究というものがすべての民芸運動の基本のところ立ったものだということを、あらためて述べられています。こういう文章がほんとうに私たちを勇気づけるものになっています。(なお、この本の巻末には向日庵私版『無染の歌』、『無明の歌』が収録されています。)

## 寿岳文庫の資料整理

寿岳文庫という寿岳章子さんが寄贈されました資料ですが、紙見本が大部分とその他に書籍、資料が含まれていましたが、私が目にした当初は段ボール箱13個ありまして、中は全く未整理でした。それを何とかして、どのようなものが集められているのか知りたいと、浦部さんと整理作業を始めたわけです。当初はその箱の側面に播磨とか越中とか、旧国名が書いてあって、本来は旧国別に産地の単位で収めてあったと想定できるのですが、実際にはその後何回も繰返し見られ、色んな利用がされて中身はあちこちに混ざり合っていました。そういうまあ乱雑な状態になってしまっていたのですが、それをどういうふうに整理したらいいかということで、整理作業をするにあたり、まず箱に記号を付けて、中味を上から順番に番号を付けて、1枚1枚そのまま写真にとって、最終的にまた元にあった状態に復元できるようにというつもりで整理したわけです。収集された和紙類は、すでに先生によって番号が付けてあり、そこに記録として大きさとか、厚さとか、また紙の質の目とか糸目とかいろいろ特徴がありますので、そういうふうなリストを作ったわけです。全部で1,387点ありました。

これを作る中で、先生が向日庵本として刊行された『紙漉村旅日記』の中に、見本紙として貼り込んである紙見本があり、ここにも番号が付けてあるのですが、先生がご自分で付けられた見本紙の番号と、収集紙の番号が対照される一覧表が見つかりました。これはほんのメモ程度のものでしたが、これが1枚見つかったので、整理する上で大いに参考になりました。これが大きな転換点になって作業が進みました。

もう一つ、先生のことだから収集紙番号(紙に1枚1枚つけた番号)が、何処で集めたものであるのかということを書いた一覧の対照表があるはずだと考えたわけです。それを探したのですが、結局見つからなかったのです。それがないと出場所のわからない紙がたくさん出てきて先へ進めないわけです。何とか対照表を探したいということで、昨年多可町と向日市、寿岳邸にお願いして、この調査をさせていただくことになりました。その時たくさんの和紙関係の資料が出てくるのですが多すぎてその場では見きれないので、しばらくお預かりして持ち帰って目録を作りながら探したわけです。

一応目録ができた時点で、寿岳邸のある向日市に保管してもらった方がいいのではないかということで、お預かりしてもらいました。今朝ご覧いただいた資料はそういう経緯でお預かりいただいた資料です。ただ私たちが探したかった対照表は、その中にはありませんで、それは必ず先生のお宅の中に残っているのではないかという気がするのですが、それはこれから

の調査に期待することです。

そういうリストがない状況の中で、できるだけ正確な情報になるよう、現存の資料を参考にしながら整理して、総合目録のようなものを今作成しているところです。そういうものが出来たら、出来るだけ早く皆さんに公開して、研究される方々が利用できる体制ができればいいと思っております。

もう一つ大事な資料がありまして、それは「H」という箱に入っている一括資料ですので「Hファイル」と私たちは言っているのですが、「紙漉村」調査の時点で全国の産紙に関する地誌を求めて、京都大学の農政史研究室で調べてこれを書き写したノートがたくさんあります。現地で集めた資料や地誌類など、それらをまとめて、皆さんに十分に活用していただけるような資料化をなるべく早くに出来ればと考えています。

最後に雑誌『別冊太陽』の中に、先生が82歳の時の「和紙とわたくし」という一文があります。この短い文章のなかに、先ほどの調査や、このあとの辻本さんのお話のテーマである正倉院の紙の調査への先生の思いが述べられています。これをご紹介します。

…しかし、和紙へのわたくしの理解と愛を決定的に不動のものとしたのは、一九六〇年を初度として三か年にわたり、秋の曝涼期間中に、正倉院蔵の代表的な古紙の科学的調査に従事したことである。正倉院事務所から、その仕事の具体的な方策を立ててほしいとの依頼を受けたとき、一民間人にすぎない私に、国家的な重責を托した当時の和田正倉院事務所長の勇断に私は感激し、和紙研究会の同人の上村六郎（理博）、大沢忍（医博）、町田誠之（理博）、それに私（文博）の四人に、民芸風雁皮紙の国の無形文化財保持者である安部栄四郎を加えて、総勢五人のチームをつくり、それぞれの専門とする知見を生かしつつ鋭意、調査にはげんだ。

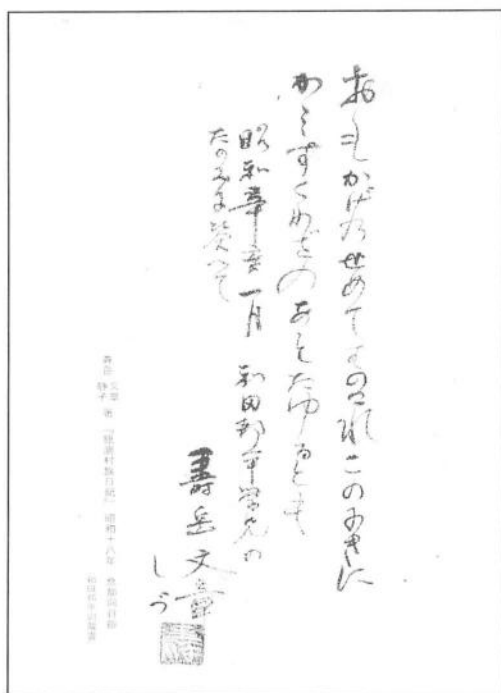
（寿岳文章「和紙とわたくし」、『別冊太陽』、平凡社、1982年）

正倉院の和紙の調査は先生にとってほんとに大きなお仕事でしたし、和紙の世界にとっても画期的なことでありました。そのお話を今から辻本さんに聞かせていただきます。

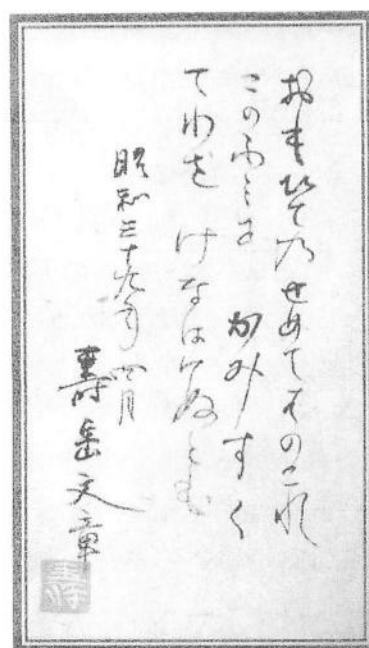
ご清聴ありがとうございました。

[文字起こし：長尾史子]

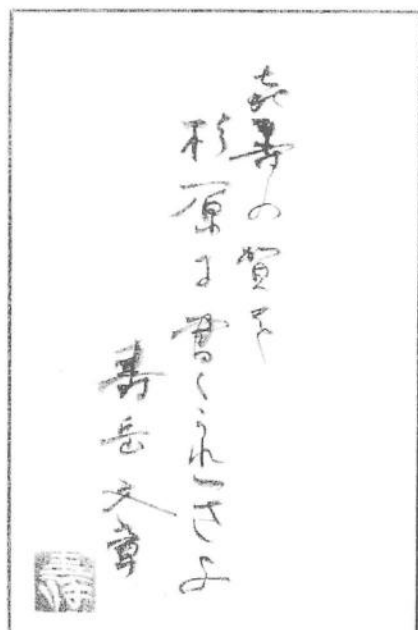
【資料】「寿岳文章の和紙研究与寿岳文庫の資料」



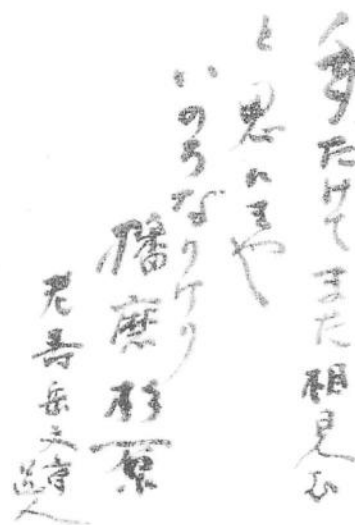
『紙漉村旅日記』和田邦平氏寄贈本サイン 昭和46年



春秋社版『紙漉村旅日記』 昭和39年



寿岳文章『和紙漉村旅日記』 湯川書房 昭和51年発行



多可郡加美町立杉原紙研究所 開所式 記念帳 昭和47年(1972年)4月16日



第2回

# 伝統の手すき和紙十二匠展

昭和53年11月14日(火)⇒19日(日) 日本橋三越 7階催物会場

同時催展 やまと風創作和紙人形展 <やまと心>

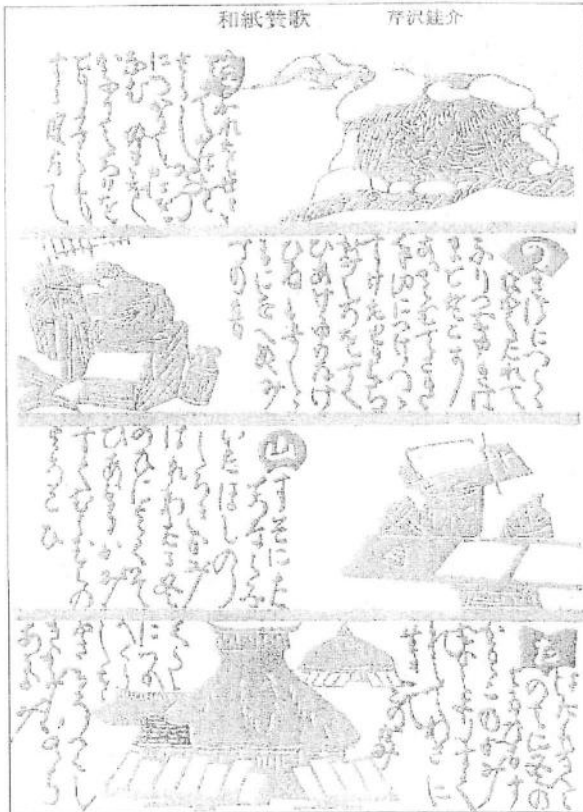
◆揉紙実演 徳島県無形文化財 松田 喜代次

和紙十二匠展によせて

英文学者市川節子  
和紙流芳会顧問  
寿岳文章

私たちが夫婦が、日本全国の手漉紙業の現状を四年がかりで調べてきたのは、太平洋戦争の前夜、日支戦争はすでに始まり、国営バスも燃料をガソリンから木炭に切りかるといふ非常事態の最中であつた。労働力も極度に不足していたが、それでも中部や東北の紙すきどころへ行けば、昔ながらの正確な手法で、見るからにはほげれすような日用紙が、女手一つで漉き続けられているのに、私たちは感心した。特別な工人によつて漉かれるのではなく、伝え通りに漉きあげさえすれば、誰が漉こうと、それが立派な紙になる和紙黄金時代の余映を、私たちはこの巨て見届けたわけである。

ご承知のように、戦後は事情が一変し、国民の総所得はふえたけれども、和紙生産人口は激減し、もうだめかと私を絶望させたことも一再にとまらなかつたので、このごろ私は、望み無きにあらずと思つた。何ともしても和紙文化のすげれた伝統を守り抜こうとする熱意に燃える工人が、少なからず各地で名乗りをあげたからである。和紙はじびないし、またじびしてはならないとの信念を、少数精鋭主義の旗手であるこの人たちはかく持っている。ここに展示された作品は、その信念の美しい結晶だ。和紙を愛し、その文化をいとおしむ人々よ、彼らの仕事を眺めながら目で見守つてほしい。



伝統の手すき和紙十二匠展 参加者



伝統の手すき和紙12人の集い  
**和紙流芳会**